核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council

主催：
核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

※PCU-NC は、長崎県、長崎市、長崎大学の 3 者による核兵器廃絶のための協議会。

RECNA
長崎大学核兵器廃絶研究センター

お問い合わせ先：
長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)
〒852-8521 長崎市文教町 1-14
TEL：095-819-2164 ／ FAX：095-819-2165
recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

ナガサキ・ユース代表団の Facebook
https://www.facebook.com/nagasakiyouth

Vol. 01 2013

We are Youth, We are the Future!

～未来を変えるのは、私たち～

ナガサキ・ユース代表団 2013 活動レポート

Who we are

ナガサキ・ユース代表団に関する7つの質問

Q1. ナガサキ・ユース代表団って何？

A1. 長崎県、長崎市、長崎大学の３者が構成する「核兵器廃絶長崎連絡協議会」（PCU-NC）が主催する人材育成プロジェクトです。2013 年に第 1 期生の活動が始まりました。核軍縮・不拡散問題に関する国際会議への参加とその事前事後の活動を通じて、次世代を担う長崎の若者が、この分野で活躍する世界の人々と出会い、最新の国際情勢を学ぶとともに、知識を行動に結びつける力を養うことを応援します。2013 年度は、公募で選ばれた 8 名の長崎の大学生・院生・社会人が、スイス・ジュネーブにある国連欧州本部で開催された「2015 年核不拡散条約（NPT）再検討会議第 2 回準備委員会」（右ページ囲み参照）に参加しました。

Q2. 誰が応募できるの？

A2. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・院生、および同程度の年齢の若者です（18 ～25 歳を目安）。高校生（応募時）は不可。国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、事前の学習や現地での活動を通して、この分野での知識・経験を得たいと希望する若者、帰国後もなんらかの形で「核兵器のない世界」の実現のための活動にかかわっていくことを希望する若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、国際会議の日程にあわせて海外渡航することが可能であることに加え、メンバー決定から出発までの間、事前の勉強会・ミーティングなどに原則参加可能であることが求められます。

2013 年度募集チラシ

Q3. 費用は誰が負担するの？

A3. 国際会議への参加にかかる旅費・滞在費として、一人あたり一律 20 万円を支給します。航空券・宿泊先は各自で手配します。不足分が出た場合は個人負担となります。

Q4. 誰がメンバーを選ぶの？

A4. 選考は 2 段階で行われます。1 次審査は書類選考、2 次審査は英語面接です。2 次審査の選考委員は以下の通り（2013 年度。肩書きは当時）。調 漸（核兵器廃絶長崎連絡協議会会長、長崎大学理事・副学長）、片峰 茂（長崎大学学長）、スティーブン・リーパー（公益財団法人広島平和文化センター理事長）、稲田俊明（長崎大学言語教育研究センター長）、梅林宏道（長崎大学核兵器廃絶研究センター長）。

Q5. 核問題を専門的に勉強していなくても大丈夫？

A5. 国際会議で何が議論されているかが理解でき、また、各国からの会議参加者との意見交換が十分に行えるよう、事前の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学んでいきます。国内外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。

「2015 年 NPT 再検討会議第 2 回準備委員会」って何？

1970 年に発効した「核不拡散条約（NPT）」は、その名前の通り、核兵器保有国が増えることを防ぐことを目的に作られた条約です。加盟国は 190 か国（2003 年に脱退表明した北朝鮮を含む）で、インド、パキスタン、イスラエルの 3 カ国は加盟を拒否しています。

NPT では米、ロ、英、仏、中の 5 カ国を「核兵器国」、それ以外を「非核兵器国」と定め、前者には核軍縮に向けた交渉を誠実に行うことを求め、後者には核兵器の開発や取得を禁じています。また、条約加盟国には「原子力の平和利用」（原子力発電など）の権利が認められています。

再検討会議とは、条約で定められた義務がきちんと守られているか否かを検討するため、5 年ごとに加盟国が集まる会議です。次回の会議は、広島・長崎の被爆 70 年にあたる 2015 年、ニューヨーク国連本部で開催されます。5 年ごとの再検討会議の間には 3 回の準備委員会があります。したがって、ナガサキ・ユース代表団 1 期生が参加したジュネーブでの会議は、「2015 年の NPT 再検討会議に向けた 2 回目の準備委員会」ということになります。準備委員会においても加盟国が一同に会し、約 2 週間にわたって NPT の 3 本柱である「核軍縮」「核不拡散」「平和利用」についてさまざまな立場から意見を交わします。

Q6. 現地の活動内容は？

A6. 大原則は「自分たちのプログラムは自分たちで創る」です。国際会議の場には、各国政府代表だけではなく世界各地から NGO や専門家、大学生などの若者も多数参加し、さまざまな会議やワークショップ等が同時並行で行われます。それらに参加したり、また、自分でイベントを企画することも可能です。各国の外交官との意見交換や、現地の大学や高校を訪問することもできます。参加者一人一人の興味や関心、目標に沿って、オリジナルの現地活動プランを立てていきます。SNS を通じてリアルタイムの情報発信も行います。

Q7. 帰国後の予定は？

A7. 長崎で報告会を行います。その後の活動は「ナガサキ・ユース代表団」メンバーとしての義務ではありませんが、一連の活動を通じて得た知識や経験、国内外の人々とのネットワークを活かして、何らかの形で核問題にかかわっていくことが奨励されます。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）には、核問題に関心を持つ人々が集う「RECNA サポーター」という自主的な枠組みがあり、核問題での勉強会やイベントを日常的に行っています。大学生・高校生も多く参加しています。ここで活動していくことも一つの方法です。

「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦

第一期生メンバーによる活動のごく一部を紹介します

2013 Members

ナガサキ・ユース代表団・第1期生
（肩書き、学年は2013年時点のもの）

（写真左から）江島健一（長崎大学医学部医学科６年）、下田杏奈（長崎大学教育学部４年）、橋口優乃（長崎大学経済学部２年）、前川陽香（長崎大学経済学部３年）、胡芳欣（長崎大学経済学研究科・中国山東大学大学院から長崎大学大学院への交換留学生）、斉藤佑布子（長崎大学事務補佐員）、大田祐一朗（長崎大学経済学部３年）、福田翔生（長崎大学経済学部２年）

サリバンさんは「あなたの大切なもの、大事な人、誇りに思うことは何か」と問いかけました。核兵器が使用されれば、このような大切なものがなくなってしまいます。核問題は私たちから遠い問題、国どうし政府どうしの問題ではない、個人ひとりひとりが密接にかかわっている問題であると実感しました。

1 出発前

～ワークショップ「核兵器のない世界を想像してみよう」～

在ニューヨークの軍縮教育家、キャサリン・サリバンさんを迎えての参加型ワークショップを受講。2人ペアやグループでのディスカッション、フィールドワーク、映像やアートを使った多彩なアクティビティを通じ、核問題を新たな視点でとらえる刺激的な1週間でした。

2 ジュネーブでの活動

～政府間会議の傍聴～

午前・午後と行われる本会議場での政府間会議はすべて傍聴可。目の前で繰り広げられる国際議論の臨場感に圧倒されつつ、必死でメモを取っていきます。

日々の新しい発見はユースメンバーそれぞれが毎日ブログで綴っていきます（https://www.facebook.com/nagasakiyouth）。「核兵器の非人道に関する共同声明」をめぐる議論には外交の難しさ、被爆地の思いの届かないもどかしさも痛感しました。

本会議中の「NGO 意見表明セッション」では、市民社会の代表が各国政府を前に意見を述べます。長崎市長や被爆者、若者代表も発言します。若者演説の文案策定にはユースメンバーも協力しました。

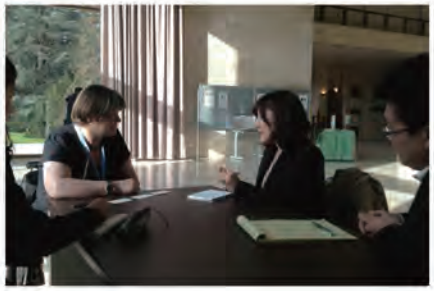
本会議場の様子

ナガサキ・ユース代表団の提案で若者演説に以下の一文が入りました。“We have not experienced the same suffering as the Hibakusha, but we can imagine the inhumanity of these nuclear weapons by listening to their testimonies.”（私たちは被爆者と同じ苦しみを経験しているわけではない。しかしその証言を聞くことによって、いかに核兵器が非人道的なものであるかを想像することは十分に可能だ。）」

～ネットワーキング～

準備委員会の場には、100カ国以上の政府や国際機関の関係者だけでなく、核問題に関心を持つ世界各地の人々が集結します。この機会を最大限に活かそうと、ユースメンバーは、最前線で活躍する外交官、専門家、NGO関係者と、多くの意見交換の場をもちました。その中には準備委員会の議長を務めたルーマニアのフェルーツァ大使、ラテンアメリカ・カリブ海核兵器禁止機構（OPANAL）のウベダ事務局長、英アクロニム軍縮外交研究所所長のレベッカ・ジョンソンさん、天野万利軍縮大使（当時）などが含まれます。また、国際赤十字委員会（ICRC）、世界保健機関（WHO）、ジュネーブ安全保障政策センター（GCSP）など在ジュネーブの国際組織も訪問しました。加えて大きな成果は、世界各国から参加した若者たちと出会い、今後に繋がるネットワークを築いたことです。

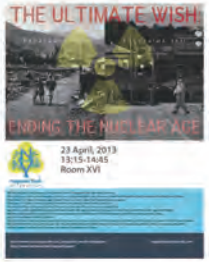
▲コーネル・フェルーツァ議長（中央）



▲レベッカ・ジョンソンさん（左奥）

～国連内ワークショップの開催～

▲自主ワークショップでのディスカッションの様子



国連内で配布したワークショップのチラシ▶

準備委員会が行われる国連の建物では、本会議と並行して、NGO等が主催するさまざまなイベントが行われます。北東アジア非核兵器地帯をテーマにした日韓NGO主催のワークショップでは、ユースメンバー2名が若者の役割についてプレゼンテーションを行いました。

4月23日にはナガサキ・ユース代表団の自主イベントを開催しました。キャサリン・サリバンさんらのプロデュースによる「The Ultimate Wish（究極の願い）」という映画を題材にしたディスカッション中心のワークショップです。映画上映後に参加者同士で感じたことや考えを共有しました。ランチタイムということで参加人数は少なめでしたが、ドイツの大学生グループも参加し、日独の原発政策についても熱心な議論が交わされました。

～日本語補習校での平和授業～

ユースメンバーは、医学、経済、教育など、一人一人の専門分野における知識や経験を生かした活動を行いました。

教育学部のメンバーを中心に行ったのが、日本企業の駐在員や国際機関の日本人スタッフの子女が通う「ジュネーブ日本語補習学校」での平和教育の実践です。小学生向け、中学生向けと2日間にわたって「大学生による平和の授業」を行いました。日本から遠く離れて暮らす子どもたちが被爆の実相を知るとともに、平和な未来への希望を描けるような内容を組み立てました。「もし長崎と同じ原爆がジュネーブに落とされたら、パリからでもきのこ雲が見える」といったICT教材を使った説明に、スクリーンを見つめる子どもたちからは一斉に驚きの声が上がっていました。

～SAKURAプロジェクト～

「核兵器は遠い、誰かの問題ではない。私たち一人一人が密接にかかわっている問題だ」。ユースメンバーはこうした問題意識をもって準備委員会に臨みました。その思いをさらに多くの人々と共有するために、メンバーの有志が行ったのが「SAKURAプロジェクト」です。外交官を含む現地で出会った人々に「自分の大切にしているもの（人）」を桜の花をかたどった紙に書いてもらい、核兵器はこれらの「愛するもの」を一瞬で破壊してしまうというメッセージとともに、それを桜の木のオブジェに張り付けていく、というものです。

3 帰国後

～修学旅行生への出前講座～

5月15日、岡山県の中学校から要請を受け、修学旅行中の中学生を対象とした平和講座を行いました。ユースメンバーの活動を中心に、長崎の若者の取り組みを紹介しました。

～米大学生との意見交換会～

5月19日、米インディアナポリス大学の「広島・長崎講座」受講生との意見交換会を長崎原爆資料館で行いました。

～活動報告会 “We are Youth, We are the Future!” ～

6月14日には「ナガサキ・ユース代表団」としての活動のまとめとなる活動報告会を長崎大学文教キャンパス内で開催しました。

ナガサキ・ユース代表団1期生としての公式活動の終了後も、それらの活動を通じて得た知識・経験・人脈を活かし、ユースメンバーは各方面で活躍しています。

68回目の長崎原爆忌の翌8月10日には、ユースメンバー有志を含めた若者で構成する「8.10実行委員会」が企画・運営を担い、イベントを開催しました。「大学生が動き出す～核の今、世界の未来～」と題したこのイベントでは、核兵器を巡る世界の現状を「劇」で表現するなどの工夫を重ね、新しいスタイルの若者主体のイベントを目指しました。全国各地からの大学生の参加もあり、予想を超える120人が出席。ユースメンバーがジュネーブで出会った、ヨーロッパの若者団体「BANg」のマイラ・カストロさんも来てくれました。

～若者の挑戦は続きます～

「大学生が動き出す」―この言葉の通り、被爆地長崎の大学生に新しい風が吹き始めています。核兵器というテーマは、まだまだ多くの学生にとって「遠い、難しい、自分と関係ない」問題かもしれません。でも「ナガサキ・ユース代表団」の存在がきっかけとなって、この問題に目を向ける若者の数は少しずつ、でも着実に増えています。

「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦はまだまだ続きます！